

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

2025 年 9 月 18 日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 藤 洋 作 様

所属部局・研究科 京都大学医学研究科 皮膚科学講座

職 名・学 年 博士2年生

氏 名 李 様言 (リ モンゲン)

助 成 の 種 類	令和7年度 ・ 国際研究集会発表助成		
研 究 集 会 名	ESDR 2025第54回欧州皮膚研究学会		
発 表 形 式	☐ 招 待 ・ ☐ 口 頭 ・ ☒ ポスター ・ ☐ その他(		
発 表 題 目	PHLDA3 as a regulator of cell proliferation and its potential role in keloids		
開 催 場 所	アントワープ(ベルギー)		
渡 航 期 間	2025 年 9 月 8 日 ～ 2025 年 9 月 16 日		
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版1枚程度で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 ☒ 無 ☐ 有()		
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	350,000 円	
	使用した助成金額	350,000 円	
	返納すべき助成金額	円	
	助成金の使途内訳 (差し支えなければ要した 経費総額をご記入ください)	費 目	金額(円)
		航空運賃	180,441
		宿泊費	169,559
		滞在費	
		学会参加費	
	その他		
	以上に助成金を充当		
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) このたびは、京都大学教育研究振興財団からのご助成を賜り、誠にありがとうございました。おかげさまで、大変充実した学会参加の時間を過ごすことができました。さらに、助成金の手続きに際しても非常に迅速かつご丁寧にご対応いただき、そのおかげで渡航準備や学会発表の準備を安心して進めることができました。		

1. 国際研究集会概要

このたび、2025年9月10日から13日にかけて、ベルギー・アントワープにて開催された第54回欧州皮膚研究学会（European Society for Dermatological Research, ESDR 2025）に参加いたしました。ESDRは1970年に設立された皮膚科学分野における欧州最大規模の学会であり、基礎研究から臨床応用に至るまで幅広い研究成果が発表される国際的な場です。欧州のみならず、アジア、アメリカをはじめとする世界各国の研究者が集い、最先端の知見を共有し、学際的な議論を行う貴重な学会として知られております。

2. 研究発表内容と学術的交流

今回私は「*PHLDA3* as a regulator of cell proliferation and its potential role in keloids」という演題で発表を行いました。本研究は、瘢痕ケロイドにおける*PHLDA3*遺伝子およびその領域に存在するSNPの機能的役割を解明することを目的としたものであり、体外実験にてloss of functionとgain of functionの両面からアプローチを行いました。本発表はPoster Walkに選出され、ポスター展示だけでなく、3分間口頭発表と3分間質疑応答を行う形式でした。

発表の際には、研究の意義や実験デザインの工夫、今後の展開について多くの研究者から質問や意見をいただきました。例えば、「*PHLDA3*のシグナル経路における位置づけ」「臨床サンプルでのSNPの多型頻度と病態の相関」「in vivoモデルを用いた検証の必要性」といった観点からの指摘があり、研究をさらに発展させる上で大変参考になりました。特に、異なるバックグラウンドを持つ研究者からの多角的なコメントは、自身では気づきにくい点を改めて認識する機会となり、自分の研究を国際的な視野で位置づけるうえで貴重な経験となりました。

3. 成果展示と大学交流

さらに、学会終了後の9月14日～15日には、イギリス・サウサンプトン大学において研究交流の機会をいただきました。本交流では、肥満細胞や好塩基球がメラノーマや慢性蕁麻疹において果たす役割をテーマに議論が行われ、炎症や腫瘍形成におけるこれらの免疫細胞の位置づけやシグナル機構について詳細な知見を得ることができました。特に腫瘍微小環境における肥満細胞の双方向的な作用や、慢性炎症モデルにおける好塩基球の寄与についての議論は、私の現在の研究テーマとも強く関連しており、今後の発展性を考える上で大きな刺激となりました。

また、交流後にはHealy教授と約2時間にわたるディスカッションを行い、私の研究課題について実験系の構築方法、臨床サンプルとの結びつけ方、さらに国際共同研究の可能性について具体的な助言をいただきました。長時間に及ぶ議論の中で、自身の研究をどのように発展させれば国際的な水準に近づけるのか、また研究計画の戦略性をどのように高めるべきかを明確にすることができました。この機会には、単なる学術交流を超えて、研究の方向性を再構築する契機となり、今後のキャリア形成にとっても極めて重要な経験となりました。

4. 研究交流を通じて得られた知見と今後の展望

今回の学会参加を通じて、研究の幅を大きく広げると同時に、今後の研究展開に直結する具体的なヒントを得ることができました。特に、創傷治癒や線維化研究の分野において世界をリードする研究者と直接交流できたことは、極めて有意義でした。例えば、中国・华中科技大学同济医学院附属协和医院のYang先生の研究では、multi-omics戦略（ex vivo実験、エピジェネティクス解析[ATAC-seq, ChIP-seq-

MS, CUT&Tag]、シングルセル解析 [scRNA-seq] など) を駆使し、さらに Cre-loxP マウスやケロイドヌードマウス移植モデルを組み合わせることで遺伝子機能を多面的に解明しており、その研究デザインの緻密さに大変感銘を受けました。私は現在 *in vitro* 系を中心に研究を進めていますが、体外実験系を確立した後は、このような *in vivo* 解析に挑戦していく必要性を強く感じました。

また、イギリス・AstraZeneca R&D Cambridge の X Romero Ros 先生 が発表された 3D モデルを用いた研究は、細胞間相互作用やサイトカインネットワークを解明する新たな方向性を提示しており、私の研究においても体内系に移行する前段階として導入可能な重要な手法であると感じました。このように、多様な研究アプローチに触れることで、自分の研究の限界点と可能性の両方を再認識でき、今後の研究戦略を描く上で極めて大きな刺激となりました。今後は、得られた知見を基盤として、国際的に通用する研究成果を発信できるよう一層努力してまいります。

5. 謝辞

最後になりましたが、今回このような貴重な国際学会に参加し、自身の研究を発表する機会を得られたのは、ひとえに 京都大学教育研究振興財団のご支援 の賜物です。助成金は主に渡航費・参加費として使用させていただきましたが、もし本助成がなければ、今回の発表や国際的な交流の機会を得ることは決してできませんでした。改めて心より感謝申し上げます。

今回の経験を通じて得られた多くの知見・人脈は、今後の研究活動において大きな糧となるものであり、必ずや研究成果として結実させる所存です。今回のご支援に深く御礼申し上げますとともに、今後も一層精進して研究に取り組んでまいります。

